

## 2020年度文系チャレンジ講座（第7回）を実施しました

12月16日（水）に教育学部の森下 覚先生を講師に迎え、「『理解』とは何か—理解することの学びほぐし—」というテーマで、文系チャレンジ講座の第7回を実施しました。遠隔配信した国東、大分商業、臼杵、大分雄城台、竹田、安心院、大分西、大分鶴崎、中津南、日田、三重総合と来学した大分東明の12校283名が受講しました。

先生は、日常生活の中で、当たり前に行っている「理解」ということの意味するところを、具体的な例を使って「まなびほぐす」ということで、講義を始められました。まず「理解」とは、基本的に自分の都合の良い取捨選択に



なっていることを「星の配置」や「だまし絵」「ルビンの壺」などの視覚的な例と、「電車のアナウンスの反応としてのカクテルパーティー効果」等、物・音・情報による理解などの例を挙げて示されました。その上で、「理解」することを取捨選択していることで、「理解の固定化の危険性」があることを説明されました。

次に「理解のしくみ」について、環境・言語・知識・概念・経験・化学など蓄積された文化全般を文化的な道具と定義し、その文化的な道具は、人・時間・場所により異なり、受講生に例を挙げてもらいながら、文明の中で生まれた以上、文化的な道具から離れることはできないので、「理解」とは、文化的な道具と切り離して理解することは困難であると話されました。

「現実とは」では、現実を私たちがどう理解しているかを考えるとき、文化的な道具を用いれば、現実を変えることができることを、身近な「水の運びやすさ」を例に確認しました。「現実の仕組み」を理解し意識することは、あるがままの現実を受け入れるのではなく、再デザインするという考えを持つことができるので、魅力的であると語られていました。

そして最後に、「学校」とは文化的道具がたくさん詰まったところで、世界の仕組みをわかりやすく伝えるための貴重な場所であると、受講生に伝え、学校での勉強＝世界の仕組みを理解するという手間を惜しまず、世界を自分の手で変えていく意思を持った人材になってほしいとエールを送られました。



講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して授業がよかった」（100%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ）、「教員は真剣に取り組んでいた」（100%）、「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」（100%）という結果でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」（97%）、「映像はよく見えた」（97%）という結果が出ました。

### 2-4 「理解の固定化」の危険性

- ・「理解」は、基本的に自分にとって都合の良い取捨選択になっている。
- ・日々生きていく中で、自分にとって都合の良い「理解」が徐々に固定化していく。（＝理解の固定化）
- ・多様性（自分以外の理解の方法）を認められなくなる。

→急速に価値観が変容する時代において、理解が固定化することは、致命的なこと。